

## 梅園の言う真実の学問

三枝博音

### 一 梅園への関心

昭和十三年(一九三八)の秋であったと思う。東京の市電の全線の車内に「梅園百五十年祭」という小さいポスターが貼られた。梅園と市民のそれについての知識とを合せ考えてみて、不思議な気がした。記念祭はお茶の水の聖廟(湯島聖堂。東京都文京区湯島にある徳川綱吉によって建てられた幕府直轄の学問所)で開かれた。もうそれが四年前になる。梅園が歿して一五四年になるわけである。その年に、四箇所で記念祭が行われた。その頃、一般の知識階級にそんなにひろく関心をもたれていたわけではなかった。しかし、日本人の世界観を求める人々は、すでに強い関心を梅園に寄せつつあったことは、確かであった。それが今日となれば、ずっと事情が違つて、梅園の世界観に心をひかれている人が、大層多くなつているよう思えるのである。

現実において世界の秩序が全く変わろうとしている。こうしたとき、人は誰でも新しい世界観をもとうとするのである。それはしかし、トルストイの代りにベルグソンをとか、ヘーゲルの代りにデイルタイをとか、いふのとは違ふのである。前着ていた着物をきふるして新しいのをほしがるという態度とは全く異つていふのである。新しい世界秩序の上に立つて、学問は一般に何と理解されるか、芸術は何と考えられてよいか、技術は

日本精神とどう本質的に結びついているのであるか、個人道徳は如何なる位置を人倫の中でもつていのであるか、死の問題はどうか、生の問題はどうか、総じて宗旨はわれらの文化の中で如何なる意義をもつか、そういう問いが、相あつまつて、一つの新しい世界観の要求となつて来ている。もちろん、この要求の中核には、日本人としての世界観を求めるといふ意欲が熾烈なのである。

これらの問いに答える思想家や哲学者が日本にいないことはない。いなくてはならぬ筈である。しかし、よく右の諸々の問いのすべてに<sup>こた</sup>応え、<sup>しか</sup>而も問題をきわめて根本的なところから教えてくれる思想家は、そんなにあるものではないのである。梅園はその中であつて、まことにひとり高く輝ける哲学者といつてよいのである。

## 二 学問のほんとうの意味（その一）

私はここでは、人は学問を何と理解してゆくべきであるかについて、梅園が教えてくれていることを述べてみようと思う。梅園は「学問」とか「<sup>がくもん</sup>学文」という文字を用いたが、その中には私たちが今日理解する科学のことも含まれていた。「科学」なるものを根本的に精細に論ずるという点で、梅園ほどに徹底した思想家は少いのであるが、それは又の機会にゆずることにしたい。人々が一般にいう学問とか知識に対して私たちはどう考えて進んでゆけばよいか。その点を教えてくれたことを述べることにしたい。世界観といわれるものは、学問を考えるとところに、基線にふれて出てくるのである。学問に対する梅園の態度の率直に出ているものは、次の言葉である。

「学問は飯と心得べし」

何という道破であろう。私たちは飯なくして半日も過ぎられない。味うことの度に従つて、栄養は益々加わる。

美味に淫し、飽食に走ればからだをこわすように、学問が人の人格の脾臓の奥までやぶっている例は多いのである。梅園は又いう、「学文がくもんはくさきなの様なり。とくと、くさみを去らざれば、用ひがたし。少し書を読めば少し学者臭し。余計書を読めば余計学者くさし。こまりものなり」

学問を、くさきなの様に真摯に考えている人が果してであろうか。「学問は魔障なり」といつた遠い昔の法然のことなど想い出される。

学問は謙虚のうちになされねばならぬと私たちはみんな思うのであるが、なかなかそうゆかない。梅園はこう言った。「足の皮はあつきがよし。つらの皮はうすきがよし。人諸共に小賢しく、口はきけども、行ひは女童に見限らる。さる故、面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむこと多し。よく心得てつつしむべし」これらの言葉を私たち日常の行為に照してみると、何という含蓄のある言葉であろう。

以上の言葉は『戲示し学徒』という文の中に見出されるが、『塾制』の中に、次のようなゆかしい考えが見えている。晋しんとあるのは、梅園のことである。

「晋しんは孖山しざん農夫なり。負担して繇役ようえきをとるわが分なり。しかるを幸に先人の余資を以て傭作ごさくをかりて、負担の役をみづからせざることを得たるものは、先人の賜なり。しかれば我肩をならぶべきものは工商なり。我後うしろにつくべき者は、俳優うしろ売姪乞児屠人にき(婦?)す。もとより位次のあらそふべき望もなし。しかるを蝙蝠こうもりの質を以て誤て鳥の名をぬすむ。似べくもあらぬ一日の長を二三兄弟に推さる。もとより人を教ふべき学をつまぬにて厳然として諸兄弟の上にしたたんも面羞気なり。しかれども、妄みだりに一日の長さを推おされ侍はべれば辞することを得ず。塾中の主人たり。長を我に推おすは諸賢の恭なり。教授の徳なきは我自おしる処也。さるを以て、門内の位次はしばらく貴公の人を凌ぐ車をゆるさるべし。門を出づれば一田夫なり」

どういふ人にして学者であるべきであるか、どういふ人にして教授であるべきであるか、そういうことが梅園独特の表現をもつて、右に述べられている。学問というものは何であるべきかを、現実のことから遊離しないで、こんなに切実に言っている例は、そんなに多くあるまい。事、学問のことではあるが、日本人のもつべき世界観の骨子が出ているのである。

### 三 学問のほんとうの意味（その二）

学文がくもんはくさきなの如きもので、少し書を読めば少しくさく、よけい書を読めばよけい学者ぶるといふ教えは、私たちの日常の反省においてどれほど役立つことか、梅園のそうした学問観や、学者観はどうしてできたのであろう。それにはいろいろその拠きたつて来るところがあるであろうが、何よりも梅園が学問というものの本質を把握していることにもとづくものと思う。ほんとうに、よくものを知り、事象の真理に通ずるといふには、我執を離れることが第一であるといふのが、梅園の教えである。我執を離れたいと思う人は、自然の世界を学べばよいと彼は言っている。自然の世界を学ぶといふことは、梅園の言葉でいうと、「天地の条理」を知れといふことであるが、天地の条理を知るといふことは、今日の自然科学の知識をとり入れるように心がけることである。自然の公明さを学ぶことである。明治の哲学者西周にしあまねの言葉をかきとれば、「物理のア・プリアリ」を学ぶことである。或る知識人や或る学者たちが特にもち上げるから真理と見えたり、見外しているから真理でないように見えたりすることの決してない、自然自身のもつ真理を学ぶことである。これは一方では醜い我執をもたぬ学者だたと自分が判定する人の書物を読み、他方でその学者の紹介してくれた知識が、技術や産業や政治の面においても真実だといふことを自己証明してくるのを、公平に見ることである。そのような

態度でいれば、知識に拘泥こうでいしたり、知識が鼻にかかったりすることはまずなくて、又は、少くてすむのである。梅園は「大同」と「好尚」とをよく知れと言っている。大同とは、大勢みんなで同じく一致するところのものである。好尚とは、その人その人の好み尚たつとぶところである。自然科学者といつても、なかなかこの好尚を学問の中へもち出す人が少なくない。経済学者や歴史学者でもそうである。政治家などには、こればかりだといふのさえ折々ある。この好尚が強まり偏すると、我執となり、ついにはそれが学問の敵となる。「是非を大同の上に分ち、各の好尚を海の如く容るべし」と梅園は言っている。容れるとは、真理だと許すことではなくて、或る条件がととのうと人間はかくかくのことを確説し確信するものだなど思ってみ、その立場においてこれを許容してあげることであろうと思う。

梅園の知識観や学問観は、日本人のゆかしい世界観を表明しているのである。

- 『三枝博音著作集』第五卷「三浦梅園・日本文化論」（一九七二年十月、中央公論社）所収。
- 底本にある振り仮名の他に、読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解に便ならしめるために、割注を付けた。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2 $\epsilon$</sub> でタイプセッティングを行い、dvi<sub>ps</sub>pdfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。